

教会に初めて行ったときに、こんなことで驚いたのを思い出します。それは毎週、「説教」の時間があるということです。というのも、わたしたちが普段イメージする「説教」とは、カツオが浪平さんに叱られているような場面だからです。

説教の一般的な意味を調べてみると、次のようがありました。「目の下の者に対して教え導くために言い聞かせることや、反省を促すなどのために道理や教訓などを堅苦しく話すこと」。

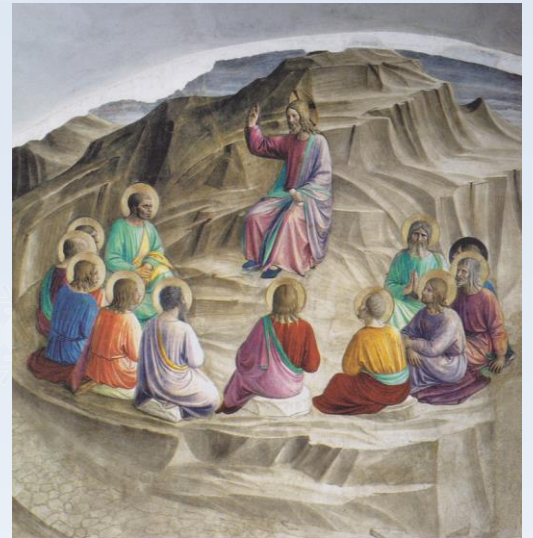
しかし「宗教」における説教とは、「その教えを説くこと」と書かれています。広い意味では宣教の行為全般のことですが、多くの教会では、説教とは特定の会衆を対象とした聖書の解き明かしであり、公の礼拝でなされるものを指すのではないのでしょうか。

聖書の中には、イエス様の説教がいくつも載せられています。たとえばマタイによる福音書 5～7 章には、「山上の説教」がありますし、ヨハネによる福音書 14～16 章には、弟子たちに対する「告別説教」が収められています。その中でイエス様は、神さまの愛や約束、そして希望を語られているのです。

多くのプロテスタント教会の礼拝では説教が重視され、説教の時間も 40 分～1 時間以上というところが多いようです。それに対してカトリック教会は聖餐の部分が重視され、説教はそれほど長くないようです。聖公会もどちらかというとその傾向があり、15～20 分くらいの説教が多いのではないのでしょうか。ただし短いからといって、説教をおろそかにしているわけではありません。

なお多くの説教者は、説教の前後にお祈りをします。語られる言葉が、聖霊の働きによって神さまの御心に適ったものとなるようにと祈るのです。説教者の口から出た言葉であったとしても、神さまの思いがそこにあらわされるのです。

今回は「洗足」です。お楽しみに。



「山上の説教」

フラ・アンジェリコ

(1395 - 1436 年)

イエスはこの群衆を見て、山に登られた。腰を下ろされると、弟子たちが近くに寄って来た。そこで、イエスは口を開き、教えられた。

(マタイによる福音書 5 章 1～2 節)

